

後拾遺和歌集







Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The handwriting is dense and fills most of the page. The text is written in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The handwriting is dense and fills most of the page.



























後拾遺和歌集第一

春上

正月一日よみゆけり

小大君

いと福めおこさるしはふとまきつとてさかきけり  
みら乃くめゆけりは春きじ日よみゆ  
けり

克朝法師女

此くみよの霞とま思し春いそよりわくはけ  
春い東よりきこころこよみゆけり

源師賢朝長

東路はしそ乃開とあつとのをいそ春はくし  
春そじ日よみゆけり

橋後總朝長

相坂乃開とや春とあしにをいそはくし  
寛和二年花山院守令よみゆけり

大中臣信宣朝長

春乃とら道のしるみりのよはるがすは成る  
こころちあはらさるゆけりは春はくし  
人のこころゆけりはよみゆ

今昔多しは思ふはなかく年たふち成るあり



















白紙

民部卿行信

あつたての野(の震)のいふまゝにのちをのちをのちをのちを

承暦二年の裏言をよみかへす

左と申す所

あつたての野(の震)のいふまゝにのちをのちをのちをのちを

承暦二年の裏言をよみかへす

伊勢大瀧

あつたての野(の震)のいふまゝにのちをのちをのちをのちを

承暦二年の裏言をよみかへす

道宗朝の御事

白紙

あつたての野(の震)のいふまゝにのちをのちをのちをのちを

大申は法宣朝也

あつたての野(の震)のいふまゝにのちをのちをのちをのちを

和泉式部

春日野(の震)のいふまゝにのちをのちをのちをのちを

後冷泉院御所のまゝの御事

中京頼成妻

あつたての野(の震)のいふまゝにのちをのちをのちをのちを

承暦二年の裏言をよみかへす



藤三位

長樂もり〜時ときの震ふるど〜  
長樂もり〜時ときの震ふるど〜

大江正吉

都みやこの考しるし〜  
都みやこの考しるし〜

信周法師

震ふる〜  
震ふる〜

蓮子の親

春はる〜  
春はる〜

藤原節信

路みち〜  
路みち〜

曾孫お忠

〜  
〜

信周法師

〜  
〜

讀人不知

〜  
〜



春乃あけこころはよみえら

権僧正静因

わじりのもろち乃はるのくわ冬ふゆらかにい駒うい哉

長久二年は徽殿女御みまをたけし春

功ことよみえら 源兼長

まゝに澤さわへあわらる考約こうやくそのおをまとあじみる

屏凡びんぼんのあききかかくしれわく旅人の

眺ながむする所をよみえら

後永長徳

からのころにいりてまましこを乃のわらひの京きやうよましに鳴なり

まゝに

和泉正部

妹いまの命いのちします若れ野は霧のふるまをいまのあや

後冷泉院ごれいぜんいん御ごはら右みぎ家のの命いのちをいまのあや

りら 後永乾元朝ごえいけんげんていを

むちのころにいりてまましこを乃のわらひの京きやうよましに鳴なり

屏凡びんぼん乃のあききかくしれわく旅人の

所ところをよみえら 平直感

梅うめのころにいりてまましこを乃のわらひの京きやうよましに鳴なり

あらのころにいりてまましこを乃のわらひの京きやうよましに鳴なり

大申長徳宣朝おほしんちやうてんしやうていを



梅花のしるしをいふ言のわがくはあひりて

春の成りしむるをいふ言のわがくはあひりて

前入納言るに

春の成りしむるをいふ言のわがくはあひりて

春の成りしむるをいふ言のわがくはあひりて

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

清原元輔

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

前入納言るに

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

和泉式部

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて

賀茂成助

梅のしるしをいふ言のわがくはあひりて



春已だまきこしあしをよめる

後醍醐天皇

梅乃花うめのみはなとあはれしむのさかきけをいそぐみおきた  
梅花をかりくよみけし

素意法師

梅をよみかたうつみる夜あはれしむけをいそぐ地  
大皇太后宮東三條りく后ごうごをよみ  
けりよ家の紅梅はうしろへおきて花のさか  
りよのいほりあていそぐをよみ  
えしよしすへいげし

辨乳母

からあつむいそぐ梅花はけの梅はとあはれしむ  
えしよ

大江宗言

わが若かりしあはれ梅花あるあはれしむをよみ  
清基法師

凡ちけがらる梅はの梅花をよみあはれしむをよみ  
道雅みちのり三條の八条の家は障子しやうしの家のり  
梅のよあはれしむをよみ氷をよみあはれしむ  
あはれしむをよみあはれしむ

藤原行衡



物ゆへに人をもみきし梅の花<sup>はな</sup>ちりごとく氷に白く咲くを  
氷鳥梅花と云ふべし

平行章朝き

十<sup>じ</sup>もじとて人なりては自ら梅のまじりて氷のふりてを  
長樂と云ふはけつころ二月ちりあはれ  
まじりていりりけり

上東門院中将

あつれ<sup>つれ</sup>あしめらふ里<sup>の</sup>花もつれ<sup>の</sup>花の考乃にれ  
乞<sup>こ</sup>し守<sup>し</sup> 小辨<sup>せうべん</sup>  
か<sup>か</sup>は<sup>は</sup>出<sup>で</sup>娘<sup>むすめ</sup>か<sup>か</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ふ<sup>ふ</sup>ふ<sup>ふ</sup>田<sup>でん</sup>久<sup>く</sup>又<sup>また</sup>赤<sup>せき</sup>は<sup>は</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>

波<sup>なみ</sup>唐<sup>たう</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>

赤<sup>せき</sup>深<sup>しん</sup>津<sup>しん</sup>門<sup>もん</sup>

つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>馬<sup>ば</sup>舟<sup>ふね</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>成<sup>な</sup>る<sup>る</sup>あり<sup>あり</sup>又<sup>また</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>娘<sup>むすめ</sup>と<sup>と</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>  
ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>物<sup>もの</sup>ら<sup>ら</sup>唐<sup>たう</sup>太<sup>たい</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>考<sup>かう</sup>を<sup>を</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>を<sup>を</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

后京道信朝

馬<sup>ば</sup>の<sup>の</sup>侍<sup>し</sup>

う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>み<sup>み</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>玉<sup>たま</sup>章<sup>しやう</sup>と<sup>と</sup>み<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>ら<sup>ら</sup>え<sup>え</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>唐<sup>たう</sup>を<sup>を</sup>  
津<sup>つ</sup>守<sup>しゆ</sup>國<sup>こく</sup>基<sup>き</sup>

辨<sup>べん</sup>乳<sup>にゅう</sup>母<sup>ぼ</sup>

わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>感<sup>かん</sup>よ<sup>よ</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>を<sup>を</sup>え<sup>え</sup>







とくぬきもの原をくりにたて人のくりにあはせむ  
二月ニケツのころりい花々の後うしろ経綱長つなながの伏見の家  
月人ツキトくぬきの原をくりにたて人のくりにあはせむ  
そととしてたてしむ

皇太后みかど官養つかひ所

うしろの原をくりにたて人のくりにあはせむ  
花々のころりい花々の後うしろ経綱長つなながの伏見の家  
月人ツキトくぬきの原をくりにたて人のくりにあはせむ  
そととしてたてしむ

むかし

永源えいげん法師

さくら花のころりい花々の後うしろ経綱長つなながの伏見の家

中京なかつく教時

じいのころりい花々の後うしろ経綱長つなながの伏見の家  
橋元はしもと任

月ツキのころりい花々の後うしろ経綱長つなながの伏見の家  
一系院いっけいゐんの何殿なにどのとくぬきの原をくりにたて人のくりにあはせむ

ふし

源雅通げんみやう朝臣

おのころりい花々の後うしろ経綱長つなながの伏見の家  
感かんする

あつたころりい花々の後うしろ経綱長つなながの伏見の家







いづこあかきけいふふふけい

上東門院中將

いづこあかきけいふふふけい  
白河院よりて花をみくよみふけい

民部卿長家

東路乃人よこころや白河の関にそくや花をみくよみふけい

見南殿様とそく  
よの兵頼言

かろい花をみくよみふけい  
うら乃そのことよみふけい  
よすこいふまをよみふけい

大貳安貞政

考母よりて花をみくよみふけい  
むねがしんやとよみふけい

大中以信宣朝

極花よりて花をみくよみふけい  
河系院よりて花をみくよみふけい

平兼盛

道よりて花をみくよみふけい  
夜思極よりて花をみくよみふけい

信國法師



とらふは者いふはしあつとさうとていふは

梅をうへをいへてあつとさうとていふは

めらう 讀人 不<sup>ら</sup>知

うへをいへてあつとさうとていふは

とらふは者いふはしあつとさうとていふは

めらう

和泉式部

まへにいへてあつとさうとていふは

めらう

へいをいへてあつとさうとていふは

つらふは者いふはしあつとさうとていふは

道令法師

たみへてあつとさうとていふは

紫式部

世中にあつとさうとていふは

かけしあつとさうとていふは

藤原経朝

たみへてあつとさうとていふは

堀河右大臣の九条の家へてあつとさうとていふは

しるをよみかへ



前中納言原基

つゝ宿乃指りりりみし種にすものよに考いさききり

部

後京元志

思ひりし考いさききり種にすものよに考いさききり

兼曆二年の東言のちのより知ら

右大辨通後

考乃しりちし思極にみし一ルそよむにのしりちし

屏風旅人言范見みち所をらえら

平重盛

范みちの家路よかきりりりり待たれしきりりりり

屏風語三月范の宴すし所をらえら

一年にうりいし思考なれりりりりりりりりりり

後冷泉院東宮に事しりりりりりりりりりりりり

范みち言みち中林院よ返りれりりりりりりりり

良暹法師

考いさききりりりりりりりりりりりりりりりり

通宗朝を信登せしに依ける西國より言を

源縁法師

しりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

宇治系を致人信范みち言りりりりりりりりりり



















大中は能宣朝也

桜花よきまなちりそなうしよわき成入の申じあつしそころ

屏に繪しころ乃花のちも成もみかなる

所ころちり成もみ付け

源道濟

山里にちりいし成もおれ花のちり入るもい

太神宮乃ちまきく付けころちり入るも

くころちりいし成も花のちり入るも

ちり入るもくころちりいし成も

ちりいし成もくころちりいし成も

右大辨通後

ちりいし成もくころちりいし成も

山路花のちりいし成も 橋成元

ころちりいし成もくころちりいし成も

隣花のちりいし成も

坂上も成

櫻ちりいし成もくころちりいし成も

花のちりいし成もくころちりいし成も

清原元輔

花のちりいし成もくころちりいし成も



養曆二年の裏後者の年合ふこと

みはけり

後醍醐天皇

廿七日ちりし梅の花のちりし

ちりし

永源法師

ちりし梅の花のちりし

二月のちりし梅の花のちりし

古法の如運殿

ちりし梅の花のちりし

永義元年六月又日祐子の親との家より

信より

大貳三位

ちりし梅の花のちりし

ちりし

中納言定頼

年をくち花のちりし

家乃ちりし梅の花のちりし

大江素言

ちりし梅の花のちりし

白けし梅の花のちりし

ちりし

ちりし梅の花のちりし

栗田大夫の家のちりし







養父もわりのめかきもいじつて我もいじつておぼえ

兼暦二年の東奔存り後范をよめり

大納言實季

氷うた業ありみゆる小峯の老根より後をみ

民部が赤尾道江守に依りけりほこ井もよえ

うきふけり後范とよみふけり

讀人不知

すみ乃江のねみりて業のふきりて厚い後をこ

えいん 後京伊家

道徳(あ)のいさひにふりていふのいふは

大貳の遠

沼火に蛙かくなりじりて岸のいさひをわたり

長久二年に敵敵女卿家存りよめり

よめり 良暹法師

みくはりてさく蛙はるおまにさうさうわりのほ

えいん 藤原長法

おめきえに我師乃百島のいさひをよめり

は輪も道命法師に依りていさひをよめり

るよめりていさひをよめり

法圓法師



我らにちかおのめあふし鳥をこぞまきなりとてしほ

二月にいなりはなまに何事なくをきしてよみは

けり  
中納言定頼

ほしむす思ふとけ思ふなげにうまうし物言ものことばは

二月つこまりの日惜春らん人くよみはる

日よめろ  
大中長法宣朝長

ほしむす子規命のいさむる言ひ考を又とくちん

二月にいなりの日めつのはつにぬりて

めり  
北胤法師

思ひにちかおのめあふし鳥をこぞまきなりとてしほ  
かきか



後拾遺和歌集第三

夏

四月にいさち乃日より見ら

和泉式部

櫻色にわがしらもいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

四月一日にいさち乃日より見ら

後醍醐天皇

きりふまをいさち花もいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

は乃のいさち乃日より見ら

能因法師

つらな乃柄の交はるる村にいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

冷泉院乃東宮にまけりいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

源重光

夏草にすしちりあに減り多野もいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

曾根好忠

さうらに月もあはれいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

鳥の文鶏をいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

大中至補

いさち乃柄の交はるる村にいかにあはれくは内鳥もいさち見ら

いさち乃柄の交はるる村にいかにあはれくは内鳥もいさち見ら



藤原通宗朝臣

わがを<sup>えり</sup>新くももろくもたれし里は我のまよこさけりやむ  
民部<sup>つ</sup>春無<sup>は</sup>江守<sup>は</sup>はけり時<sup>こ</sup>すまにて  
年<sup>な</sup>な一<sup>は</sup>けり<sup>は</sup>うの<sup>り</sup>も<sup>は</sup>よ<sup>も</sup>ん

よみ人し

白浪乃若きしこころにみい<sup>ら</sup>うの花の垣のあはせ

し

月影を色もく<sup>は</sup>けり<sup>う</sup>の花のあせ有<sup>り</sup>初<sup>の</sup>らちせ

あ<sup>ら</sup>新<sup>し</sup>の<sup>り</sup>名<sup>な</sup>一<sup>は</sup>けり<sup>は</sup>よ<sup>も</sup>花<sup>を</sup>よ<sup>み</sup>は

し

大中<sup>に</sup>能<sup>は</sup>宣<sup>朝</sup>臣

卯花乃<sup>は</sup>けり<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>  
心<sup>の</sup>親<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>  
一<sup>は</sup>けり<sup>は</sup>よ<sup>も</sup>花<sup>を</sup>よ<sup>み</sup>は

さ<sup>り</sup>み

み<sup>の</sup>花<sup>の</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>

伊勢<sup>大</sup>補

うの花乃<sup>は</sup>けり<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>

卯花<sup>を</sup>よ<sup>み</sup>は

源<sup>道</sup>俊

あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>し<sup>の</sup>垣<sup>も</sup>



いづれ乃大よさこし新し言名しなげ

よよめんろ

元慶法師

我宿乃つゝ心なまはり孰らに其の里とありお花

乞し寸

慶範法師

馬つれおしろうしみるおまふしこのこまふまは

四月つゝあちの日名道馬場は馬場

こてあつあはつしけりよあふくろあしあしは

おさかみ共

堀河太夫

子規しあつらなるのしりよみんあし下宿あつて

道命は師よさるあはつしけりよこし

後京尚也

あにわつきあがりこを若衆のしりよすつと鳴し

ぬ

道命法師

まりのよは馬のさる寸あつし馬のあしきいお

襟子の親まかし乃いよよまけけるお女房

もてあけるあつて後三条院おあはれは

あけまのあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

皇后官養作

あつてあつてあつてあつてあつてあつて







夏のふらふらとやまぐしねぬまは島をけりしまもきけり人ふここや

小辨

祓ねよと教しけりあねは島はまきつねと向むけりあまねり  
祐子の親之家に尋たずねなごしてのち人々  
あゝももをよみけり

宇治あを奴大を

有明乃月ありあけのつきにわねつは島はまきつあまのちあまねり  
宇治前を奴大を二十歳ふのあちあまねり  
島をよみけり  
赤染か門  
あゝあゝとなくよとここに島はまきつあまのちあまねり

よしすつとちうらにわね子ね親まつしかえあまねり

相摸守まもりりのかいはけりあまねり

あゝあゝとなくよとここに島はまきつあまのちあまねり

大はら資朝を

東路あづまみち乃のわねは島はまきつあまのちあまねり

は橋忠命

きつとちうらにわね子ね親まつしかえあまねり  
長保六年ちやうほ八月はちがひ十日じふにち入道にりだう前まへを奴大を家いへ尋たずね  
名なにな島はまきつあまのちあまねり



大江の言

とつてきつていぢうは鳥か一夢のいふよきといは  
又月ちつちよあつてあつていはいりけり

道命法師

は鳥より注ぐとも鳥より飛まつての後ほつ飛ぶ  
子規よつて夢をまてのさうわふ人のちり新  
わづらを乃出まへしよわらしてよさるる  
は鳥をよつてよえり

律師長済

一鳥よつていぢうは鳥か一夢のいふよきといは

鳥をよつて

徳用法師

は鳥よつていぢうは鳥か一夢のいふよきといは

大貳三位

ましましつていぢうは鳥か一夢のいふよきといは

小辨

は鳥よつていぢうは鳥か一夢のいふよきといは

早苗をよつて

曾孫ねら

は鳥よつていぢうは鳥か一夢のいふよきといは

永業七年六月殿上の根名よつていぢうは

藤原法親



とみこはひもとくはあかりなまきこふ田んありあつとせぬ  
宇治前左衛門大夫家より千誦の後年存し  
侍けるも又月をせりある

こつみ

いんげんがいにのみよりのゆくと草わらじはまじりあつた  
宮内卿経長の桂山店もくまひれとよみ  
侍けるも

藤原範永朝

又月をみりてとう乃京とありわらじはれはのんたのん

板後總朝長

に我へて音もよきとあつた又月をわらじはれはのんたのん

いし

穀貫法師

又月をみりて音もよきとあつた又月をわらじはれはのんたのん  
又月をみりて音もよきとあつた又月をわらじはれはのんたのん

惠慶法師

あつた又月をみりて音もよきとあつた又月をわらじはれはのんたのん  
永兼六年又月五日殿上根存よりある

良暹法師

いづくははるのふくをよきとあつた又月をわらじはれはのんたのん  
右大臣中侍侍けるは言存し侍けるよきとある

人中尾浦弘



ほろろく根<sup>み</sup>こころあひめ草<sup>くさ</sup>尋<sup>たづ</sup>ねてわらわの

こころとみゆる所<sup>ところ</sup>もなれぬほろろく

あつしよのこころのこころのこころ

伊筑人浦

くさきぬわらわのあひめ草<sup>くさ</sup>尋<sup>たづ</sup>ねてわらわの

あつしよのこころのこころのこころ

さうりみ

あつしよのこころのこころのこころ

大戴<sup>おほたい</sup>のき

あつしよのこころのこころのこころ

ほろろくをよみゆる

源重<sup>げんじゆう</sup>く

あつしよのこころのこころのこころ

あつしよのこころのこころのこころ

あつしよのこころのこころのこころ

藤原良行<sup>とうげんりやうぎやう</sup>物

あつしよのこころのこころのこころ

あつしよのこころのこころのこころ

住持<sup>ぢゆうぢ</sup>法師

あつしよのこころのこころのこころ

源重<sup>げんじゆう</sup>く







いっさじ今更<sup>いま</sup>あまの夏<sup>なつ</sup>のけしきに露<sup>つゆ</sup>のおよそを初

むし〜ん

曾祢<sup>そね</sup>ねあ

あそみしむの家路<sup>いぢぢ</sup>より老<sup>おきな</sup>やえり我<sup>われ</sup>独<sup>ひとり</sup>あふ友<sup>とも</sup>友<sup>とも</sup>のも

平<sup>へい</sup>無<sup>む</sup>威<sup>い</sup>

夏<sup>なつ</sup>あすしちわろしよけろあわ〜の枯<sup>か</sup>下<sup>しも</sup>草<sup>くさ</sup>あへん

夏<sup>なつ</sup>あすしきあろとよみゆけり

堀<sup>ほり</sup>河<sup>が</sup>右<sup>みぎ</sup>大臣<sup>だいじん</sup>

花<sup>はな</sup>あく夏<sup>なつ</sup>あすしよあつらんよあつて花<sup>はな</sup>やよあ

くれの夏<sup>なつ</sup>あつ明<sup>あき</sup>の月<sup>つき</sup>とよあ

ゆ大臣<sup>だいじん</sup>

夏<sup>なつ</sup>乃<sup>の</sup>よの有<sup>あ</sup>雨<sup>め</sup>を何<sup>なに</sup>をみ極<sup>ごく</sup>に花<sup>はな</sup>を〜しては涼<sup>すず</sup>上<sup>じやう</sup>

後<sup>のち</sup>延<sup>のび</sup>朝<sup>あさ</sup>のよ〜日<sup>ひ</sup>〜晚<sup>ゆふ</sup>涼<sup>すず</sup>如<sup>ごと</sup>花<sup>はな</sup>〜い

よみゆけり

源<sup>げん</sup>頼<sup>のり</sup>延<sup>のび</sup>朝<sup>あさ</sup>長<sup>なが</sup>

かじらなるの葉<sup>は</sup>うよく文<sup>ぶん</sup>言<sup>ごん</sup>〜と〜花<sup>はな</sup>の〜花<sup>はな</sup>地<sup>ぢ</sup>

屏<sup>びん</sup>凡<sup>ぼん</sup>繪<sup>えい</sup>は夏<sup>なつ</sup>のすゑに〜の〜の〜

〜の〜の〜

大<sup>だい</sup>中<sup>ちゆう</sup>氏<sup>し</sup>信<sup>のぶ</sup>宣<sup>のぶ</sup>朝<sup>あさ</sup>長<sup>なが</sup>

〜の〜の〜

〜の〜の〜

ゆけり

源<sup>げん</sup>師<sup>し</sup>賢<sup>けん</sup>朝<sup>あさ</sup>長<sup>なが</sup>











梅元は

七夕のあしよりすはしりしとく月しのおもたわさを

右大將通房

侍立しちよらわを七夕のあしおほほかたより

七月するおこいふらしのしりけしと

あしはけしとあはしめおほしあは

のえをみくよみはけし

新左衛門

七夕のあしよりすはしりしとく月しのおもたわさを

七月するおこいふらしのしりけしと

あしはけしとあはしめおほしあは  
のえをみくよみはけし

小辨

七夕のあしよりすはしりしとく月しのおもたわさを

居易初到香山をよみはけし

後京家経朝臣

七夕のあしよりすはしりしとく月しのおもたわさを

客依月来しとく月しのおもたわさを

はけしとあはしめおほしあは

七夕のあしよりすはしりしとく月しのおもたわさを



花の東宮ご申けりし雨院はかりよして  
妹月をよしわろし給けりよみはけり

大貳言き

妹のく月みよてや<sup>お</sup>思我も有明のいおてわは  
三東を改大良たをころつて前裁うへて  
尋にいつてあつたの十六人をころして尋  
よみはけりし水上の妹月こふた成よみは  
けり

平一善盛

あつたあくよ代をたつてすじ水とをうふ妹のく月  
土御門名大良の家よ言をよみはけりし妹月を

よみはけり

源為善朝良

大なる月の光しわはれぬがに板たは妹のく月を  
河東院よしよみはけり

惠慶法師

すよよん昔の人とるに宿にすけりし妹のく月

きよ

永源法師

かたにめいりつたおは妹の月よわあひのく月を  
く人にもあつたの妹南殿月をよしわろし  
よよみはけり

源道濟



よふありしものうらまひなるほし娘の月よわのすう有る

寛和元年八月十日の裏の命をよみよ

けし 後京長徳

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

前大納言らに

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

藤原朝臣

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

推宗為経

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ

堀河右大臣

いづれなる月よわの娘のうらまひなるをよみよ



後永隆成

うにまににらひかたをわたりてわがれをまげのふか

赤深橋門

今更そよあつてあつてはれつとてついでに

部守

よみ人

妹をわたりてあつてはれつとてついでに

或へは頼陽院より八月廿九日あつて

依りては字治あを政大長哥よみ人依りて

光源法師よみ人依りて

清原え補

らく乃花のむとこく々言にせむしのおまうやあ

すじ乃くをきうてよみ人

大江の資朝長

かつらつらも〜〜〜むらむらむらむら鈴虫のあ

麻大納言ら

ら〜むらむらにむら子鈴虫らむらむらむらむらむら

むら

司東甲文

むらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

長根草のあつてはれつとてついでに

ら〜むらむらにむら子鈴虫らむらむらむらむら



くろくしあつこころをよめる

道命は仲

古婦あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

きりぎりす

年魚感

わやちうあつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

大江道衡朝き

妹はあつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

うねのうね

あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

寛和元年八月十日の裏舟をよめる

後京長徳

わやちうあつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

よめる

赤深徳門

あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

後冷泉院の時の言をよめる

伊勢大輔

あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

八月のあつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>

あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>あつちうごめ<sup>おの</sup>



御製

うへり道とて飛して唐をのきこめりつにんまをわら

八月に返じつ(なまめりつ)

良暹法師

秋のしんま

中山坂乃園の秋しんまづく種いれちよみちるを月の駒

源縁法師

みら乃くのわらち馬がいにしる相坂の園よりいさむ

屏風乃るよに返じつ(なまめりつ)とよみ

はつしつ

惠慶法師

や月乃駒いんこはいれ坂のよ乃下とよみちる有る

禅林もよみ返りて山家の秋とよみ

とよみはわける

源頼家朝臣

暮のよをわらちる乃じの言とよの山家もよみ

ら暮朝を丹後守もてはけるはくちて哥

合はけるにやえら

景

唐乃言に想をしる乃砂のかのいれねみたすけとわらねと

袂盛待唐こしよめりつ

御製







康乃言う祇まの床にきこもたふとの草臥なやま

江村伝

小倉よこばこまやあや身に妻よりしきり康よりま

きり  
しきりしきりぬ

清いのももきりあしなまきりいしりらよぬにむし

天名直源心

のいもきり合さむし思しに宿の寝らしきりあし

し乃あししあやあけしりなをきりよめ

伊勢大輔

かたわしきりしきりあしきりあまの寝のいし

みるしきりしきりすくしきり

結周法師

思しあけし思しあけ油しきりあし乃あしの寝

あしの寝にあしをきりあしをきりあし

しきりあし  
新左衛門

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

中納言女

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし







とくまゝん

藤原長統

うかまのまゝくわつちのまゝにみせめておけり白家のま  
寛和元年八月七日の裏母命によみゆけり

橘為善朝を

いとくわゝとあつた夕々此秋の葉ふじすふ白の  
とくまゝん

良遣は師

袖小袂の房には秋の葉の野はくわてあつた  
土御門右大臣家母命によみゆけり

源親範

秋乃野のわつた花さるゆけまゝ秋さるまゝ秋の  
葉の房には秋の葉の野はくわてあつた

秋の葉の房には秋の葉の野はくわてあつた  
のり秋をまゝにみせめておけり

大中は徳宣朝を

草乃乃人よがまゝくわつちのまゝにみせめておけり  
人の家乃水なりしにみせめておけり  
よみゆけり  
堀河右大臣

とくまゝん  
う乃乃のまゝにみせめておけり  
をみゆけり

板別長



女島花かぐつろのりよふしとめはしちかみと島花

歌一十

お律師度置

妹にみれしとすく女島花いふ女師にみれぬ

天曆の法の屏風はまをりてはし野は様

人乃下とれり軒をよめろ

清系とすけえ補

妹乃にありて言わぬ女島花こよみりり宿とるを

女島花と妹とこふしと

御製

宿とよめありのりよふしとめはしちかみと島花

歌一十

源道新

よふしとめありのりよふしとめはしちかみと島花

権をよめろ

和泉式部

わがとよめありのりよふしとめはしちかみと島花

歌一十

源道新

よふしとめありのりよふしとめはしちかみと島花

村よるぬは月りりありとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

弁室女御



うらふわがしほ乃女暮に疾るくは言うや  
古御門右大臣家と尋合しゆけりは妹は  
くは

か乃に吹ひては妹はの又もさしたはら  
資良朝臣をいほさわはれにり

三東小右進

あしは思ひ入言は疾のうまには吹る  
らしむらひははらるのまはら  
けは妹はのすしりあけりやわら  
てはけり  
僧都實指

疾乃に人言の女は思ひの言をわら  
花は尋合をいほしり  
けはこころをいほしりは妹はを

後京長徳

かたは吹うしろくすは長妹を  
あし乃きちをよら

大納言経信母

月ある河をきわのさしは遠の袖の  
古御門右大臣家と尋合しゆけり

後京経衛











後京長信

すゝ乃ちのちてくしはのふ月女思入のふより有け  
鑑子の親といひしつらもあはけは九月の十日  
あつわにわにしつらもあはけ人くちを  
ふよきしつらもあはけありしを  
つよみはつらもあはけ

舟院申務

月よりしつらもあはけの言さうもあはけしつらもあはけ  
山家妹はつらもあはけをよめ

人官越前

上里乃のちのちてくしはのふ月女思入のふより有け

つらもあはけ

源道深

みつらもあはけつらもあはけつらもあはけ

秋美曰年の裏の年名

堀河若人信

つらもあはけつらもあはけつらもあはけ  
岸治もつらもあはけつらもあはけ  
つらもあはけつらもあはけ

後京純衛

日よつらもあはけつらもあはけつらもあはけ







けりまのちこしよあふ

伊勢大輔

かたしすむけくくえの白重乃花より後の花一を疾

藤原義忠朝臣

業のうらみあふも重乃花のしるふも誰の心

後冷泉院は后のまひて人々を歌を事<sup>のこ</sup>す

是よりみ侍り 大藏卿長房

あふもいよまにそも重乃九重にみちる霜のそけが成る

きこ乃花もしるす所ありこもてみもあ

いよ人のまにそも重乃九重にみちる霜のそけが成る

赤染衛門

あふもいよまにそも重乃九重にみちる霜のそけが成る

天曆御は此屏けよきこそとあふは家あり

所をよめる 清原元輔

うすもいよまにそも重乃九重にみちる霜のそけが成る

屏け乃急に菊の花はこもぬる家小をらす

うすもいよまにそも重乃九重にみちる霜のそけが成る

大中臣経宣朝臣

うすもいよまにそも重乃九重にみちる霜のそけが成る

うすもいよまにそも重乃九重にみちる霜のそけが成る



はし我九月らりわにきく乃らりろひてはけ  
まきくよめか 良置法師

白菊乃らりろひのちを寝るかしくしんも人とも我  
相換る資にちかぬ我つものらつ我の家にも我  
はけらりらりろひのちのちけ我のよめか

後京純衛

植を人への白菊乃花よりさしりろひのちけき  
又東なる所につらきすみはけらるちかぬ  
はこものみこをとしてわろいはを我のよめか

中納言定頼

我乃らりろひのちかぬ古郷乃羅は事とらりろひのち  
永兼四年の裏年合に落菊をよめか

中納言資總

紫にりろひのちを霜のち成白菊とみよらるわ  
寛和二年正月入道おを政大臣大饗一は  
けら屏風に山星のちみらる人よめら所をよ  
めか

前大納言云は

ら田乃らみらるしち思はんおとそけふへあは  
屏風乃忠にちかぬにわさく女乃らぬにみ  
ちかぬわらふこらをよめか



平重盛

錦衣の御下  
御下清成

清原元輔

御製  
御下清成

御下清成  
御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成

御下清成











いふゆゑにわが世はよもやもよもやとぞ

御製

大井けるわが世はよもやもよもやとぞ  
かたじけなくもよもやもよもやとぞ  
いふゆゑに

藤原基房朝臣

復たわが世はよもやもよもやとぞ  
いふゆゑに

水胤法師

お無月もて成てしはよもやもよもやとぞ  
落葉如馬のしるしをよもやとぞ

源頼實

お無月もて成てしはよもやもよもやとぞ

藤原家経朝臣

お無月もて成てしはよもやもよもやとぞ  
十月の月の影をよもやもよもやとぞ

結城法師

お無月もて成てしはよもやもよもやとぞ  
宇治もて成てしはよもやもよもやとぞ

橋義通朝臣

わが世はよもやもよもやとぞ







侍

民部卿長家

かろくふまじら鷹のいざひの雪けあまのいざひ

くぬつとをよめる

結月法師

かろく雪とまをみかろのすきく跡ときけりか

律師長崎

嶺原と霜の秋にみりみり野あさきとみりく秋を起

屏の乃<sup>法</sup>息と十一月に女のまじり人のを

野をよめる

大中は結宣朝臣

あつ秋乃草の戸さあをいじちた乃人を

くぬつとをよめる

少輔

あつ秋のいざひに成はける千種をみり野のあま

霜落葉をいじちとくた成よめる

讀人不知

かろくをまじら鷹のいざひの雪けあまのいざひ

あつ秋をよめる

大江の賢朝臣

松乃枝をまじら鷹のいざひの雪けあまのいざひ

くぬつとをよめる

橋後總朝臣

かろくをまじら鷹のいざひの雪けあまのいざひ



永長四年の裏乃身ノミ合ノ物雪ノをよめる

こつち

都ノにしり雪ノふたのふはいの戻りも場とるは  
うらいこやをよめる

素直意師

埋火乃あるの善の地一てちりく雪代をこもみれ  
隆久式部卿乃子ノの家もて松乃うの雪  
ふら成人くよとはけらよめる

有原國行

而雪と松乃うのありぬ我久く清也おう有る

隆經朝臣甲斐守りくはけらるをよめる  
にけていりける

紀式部

といふの日根はしぬし雪あらしむもた  
乃雪をよめる

信國信師

とめらぬ乃中の志あらしのならぬ雪ふとなまる  
といふ

源道崎

あらしむ雪しぬも成からぬ乃うのいりのいりのいり

慶尋信師



お道安のし雪をとりはけはまわさくさく人よと

後東国巻

いそりちる雪をいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

校宿乃雪をいそりちるいそりちる

津守国巻

いそりちる草乃枕をいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

屏は乃雪に雪をいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

いそりちるいそりちる

赤染巻門

春やいそりちるいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

道雅二位乃公家の家なすりしりいそりちる雪

乃雪をいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

藤原行衡

雪をいそりちるいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

源頼家朝長

雪をいそりちるいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

法師はなかりしりいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる

いそりちるいそりちる

信実法師

雪をいそりちるいそりちるいそりちるいそりちるいそりちる







氷邊水結

後京孝善

しとむ乃らんかむの京の代善うたしむ浪たぬいよ

後三東院東まこまけり所殿よりくみ

うらぐれあらよりそよみ侍けり

後京河衛朝長

白母にーあ乃らんかむはけき我が年一雷にわたり

十二月乃りこまけり比倫前国より出陣の辨也

にりりけり 源為善朝長

まこまけり

わす孝成とじりかき



後拾遺和詩集第七

賀

天曆御所賀の屏凡并立春日

源順

ふとくろもりてじすよれし三年の考はありん契を  
入道括政乃賀しゆけり屏凡はるりの橋  
乃くつらつら新をよめら

平兼盛

朽木思ふくち橋のちねさよふふたねしつた  
ゆふし屏凡はしりのつがむせつた

よめり

しつち路をまわらつたよめしつち末まいつち  
東三東院四十賀しゆけり屏凡は子日し  
おこし女くらまよわつてこねむく新をよ

めり

源兼隆

霞ふくまり路乃ねあけらるるう君つよ代は  
前大僧正明る九十賀しゆけり前  
政大臣をけのじむしりけり

よみゆけり

前律師慶暹

君成乃る年の久しかり思れ先なるもくしえう



西妻乃此屏風日乃らるる人の家も松  
にらあつ新を 平兼盛

考燦とまうていぬわ我か松にらるる年成らへ  
屏にらあつはうみのりしよのまののまの  
あつ新を 源兼隆登

しせら松のまらしうものたしあひあひあひあひ  
く 讀人不知

考つ人をまうていぬわ我か松にらるる年成らへ  
後一系流しも我をたて七世の人ゆりあ  
むくも居るうにしんせんせんせんせんせん

紫式部

後兼隆院しうれをたて七世の人ゆりあ  
前大納言らに

むくも居るうにしんせんせんせんせんせん  
むくも居るうにしんせんせんせんせんせん

或人ら乃并七代し中納言うく頼りしめら  
故第一親しうも我始てうらにしんせん前并官  
しよ流しもあへては妻よりあつしんせん



あひつりて人々うきよみ侍けるよらぬら

名大臣殿房

もと又らさるるのまじりぬかひに松のしんがし  
み持敷敷にうきよもて侍ける七世はよらぬら

清原元輔

むめし松大系にうきよみ侍けるにむめし  
は唐朝にうきよみ侍けるよらぬら  
しつるすしつるあら

赤深は門

あつらひうきよみ侍けるにむめし  
あつらひうきよみ侍けるにむめし

あつらひうきよみ侍ける

あつらひうきよみ侍けるにむめし  
故才一親と乃いりりし也けるは園白あつらひ  
ち君さつるまありてうきよみ侍けるにむめし  
けはゆか下るうきよみ侍けるにむめし  
まじりて侍けるにむめし

名大臣

あつらひうきよみ侍けるにむめし  
あつらひうきよみ侍けるにむめし  
あつらひうきよみ侍けるにむめし  
あつらひうきよみ侍けるにむめし

花山院御製



















源道濟

に徳をいあらうとてふをいふをいふにけり  
東あづまのまゝに京をいふは日よみけり

増基法師

まゝにけりといふにけりといふにけり  
寺江守をいふにけりといふにけり  
まゝにけりといふにけり

後京道信朝長

ちとせといふにけりといふにけり  
ちとせといふにけりといふにけり

りといふにけりといふにけり

後京惟規

あゝといふにけりといふにけり  
か中なかつのいふにけりといふにけり  
すといふにけり

後京長住

あゝといふにけりといふにけり  
あゝといふにけりといふにけり  
あゝといふにけりといふにけり  
あゝといふにけりといふにけり

後京子親







相模

あつちよふにさかきおしるまはちのちのち  
あつちよふにさかきおしるまはちのちのち

あつちよふにさかきおしるまはちのちのち  
あつちよふにさかきおしるまはちのちのち

大沼

あつちよふにさかきおしるまはちのちのち  
あつちよふにさかきおしるまはちのちのち

いりりける

中納言定頼

あつちよふにさかきおしるまはちのちのち  
あつちよふにさかきおしるまはちのちのち

橋則長

あつちよふにさかきおしるまはちのちのち  
あつちよふにさかきおしるまはちのちのち



あはれなる御心  
よき御心

慶範法師

あはれなる御心  
よき御心  
よき御心  
よき御心

あはれなる御心  
よき御心

良規法師

あはれなる御心  
よき御心  
よき御心  
よき御心

後京家經朝臣

あはれなる御心  
よき御心  
よき御心  
よき御心

源重長

あはれなる御心  
よき御心  
よき御心  
よき御心

源重長

あはれなる御心  
よき御心  
よき御心  
よき御心



し(夏)もあつた(夏)の  
みゆきた

し(夏)もあつた(夏)の  
みゆきた

中納言は頼

よし(夏)もあつた(夏)の  
みゆきた

源光成

し(夏)もあつた(夏)の  
みゆきた

源光成

し(夏)もあつた(夏)の  
みゆきた

源光成

し(夏)もあつた(夏)の  
みゆきた











後拾遺和歌集第九

田新旅

いよよりのついでにけり道よこりて井を  
志水をやみ侍りけり

堀河右政大臣

相坂乃用こきせりしむ井水をいそむるあ新

十月ちりあはれしむるあ返りて侍りし馬  
にきり乃めりけりよみ侍り

前大納言に

ゆく道乃とみらのふとみりしを昇りしにやあし

ぬ

中納言山定頼

霧はうらふらふとみらと色にみお道はゆ  
くまの道もてならはるすみかみ  
にあま乃かたけりけり御説して

范山院御製

あはれなるよれ燈のからしあまのちかみ  
くよの返りあはけりみりし映とのあを

あ

懐国法師

まじりてあはれなるあはれなるあはれなる  
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる



女補

よ乃とていふことししと思ひ下りて孝にしては月よりある

舟よのりてりり江にりし所をいふはこしち

後京國行

よきいふよおういふことの新堀江の堀にありあり

は乃國)まらりからり

能國法師

わらわはのこころをいふ言はしむる野原を

東)女)りりけりからり

増基法師

まらりといふよはり東路をこまらににるてそり

は乃女)りりけりからり馬にりり

よ乃女)りりけりからり

和泉式部

よ乃女)りりけりからり都島にりり

よ乃女)りりけりからり(女)りりけりからり

あゑのあゑいしよはりけり

惠慶法師

鏡にりりけりからり考るのたぐりありあり

七月しりりからり(女)りりけりからり



すまの園のさしあしきりくまはかきん  
てりまはかきよみはける

赤染海門

あえりて都のきくまはかきりくまはかきん

三子

増長法師

きりくまはかきよみはける

はの園のさしあしきりくまはかきん

はの園のさしあしきりくまはかきん

良羅法師

すまの園のさしあしきりくまはかきん

為善朝長子乃守もくまはかきん

とまはかきよみはける

とまはかきよみはける

徳周法師

白中乃くまはかきよみはける

東乃くまはかきよみはける

源重光

東乃くまはかきよみはける

ちの園のさしあしきりくまはかきん

ちの園のさしあしきりくまはかきん



橋のまじりよみはけり

大江彦純朝臣

あじろちり瀆あつひのよみよみはけり  
あじろちり瀆あつひのよみよみはけり

結周法師

あじろちり瀆あつひのよみよみはけり  
あじろちり瀆あつひのよみよみはけり

あじろちり瀆あつひのよみよみはけり  
あじろちり瀆あつひのよみよみはけり

あじろちり瀆あつひのよみよみはけり

あじろちり瀆あつひのよみよみはけり  
あじろちり瀆あつひのよみよみはけり

あじろちり瀆あつひのよみよみはけり  
あじろちり瀆あつひのよみよみはけり

あじろちり瀆あつひのよみよみはけり  
あじろちり瀆あつひのよみよみはけり



むら後湯割製

月影のあかりをこころに感じたまはるる  
播磨のあかりの光をよみあはせし  
二月のあかりの光をよみあはせし  
しかりゆき

中納言資徳

あかりの都乃るをわらわし今更なり

と

繪成部

あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり

康資の母

月影のあかりをこころに感じたまはるる  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり

播磨義朝也

都よりあかりの光をよみあはせし  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり

後京国守

あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり  
あかりの都乃るをわらわし今更なり

西宮前左大臣



























梅則長く〜〜〜我はまじけるはつたつ  
まじつらける

梅季通

らるりやが〜〜〜がる〜〜らちの我を幼き  
後冷泉院乃丸のたま〜〜〜  
しはげらは〜〜〜  
の〜〜〜  
はげら  
武部命たけ

らるりやが〜〜〜  
後らるりやが〜〜〜

らるりやが〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜

周防めあ

みりぬ〜〜〜  
二東おを政を良のりあ〜〜  
〜〜〜

申納言らる頼母

〜〜〜  
子〜〜〜















つぎらあけら百和香をちへんすんよ井て  
せうご棟政朝臣よじりける

鑑子ゆ親と

のち乃考ちひじしつたをくはに今にのまてんがさあし  
かもしくあしあかきるおこしたくちりて給  
にしあいにのいれけるいふかたししこの女  
まじりける

伊勢大輔

あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
ふくもあはれける此十月一日あつらふあはれ

あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ

康賢と母

あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ

康休と母

あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ  
あつらふもあつらふもいふちりあはれあはれあはれ



おいはしりてのむらさきとてはむさくはら  
ゆいけ  
一乗院の製

おはしりてのむらさきとてはむさくはら  
後冷泉院のむらさきとてはむさくはら  
りてはしりて又のむらさきとてはむさくはら  
ぬ乃前にしりてはしりてはむさくはら  
まきとてはむさくはら

廉京殿前女御

おはしりてのむらさきとてはむさくはら  
成光日にくれはむさくはら

はしりて

伊勢大補

おはしりてのむらさきとてはむさくはら  
年一りすはしりてはむさくはら  
て乃わしりてはむさくはら

紀時文

年をへておはしりてはむさくはら  
はしりて

清原元補

わが世にんはむさくはら  
後一乗院のむらさきとてはむさくはら  
わが世にんはむさくはら















Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, possibly a name or date.

Handwritten text in Arabic script, possibly a name or date.

Handwritten text in Arabic script, possibly a name or date.

Handwritten text in Arabic script, possibly a name or date.

Handwritten text in Arabic script, possibly a name or date.

Faint, mostly illegible handwritten text in Arabic script, possibly bleed-through from the reverse side.



後拾遺和詩集第十一

戀一

東宮に申けるは故の侍のことか  
あはれなる

後朱雀院御製

あはれなるきこふ考<sup>ほ</sup>あはれなる  
あはれなる人あはれなる

教覚法師

あはれなる乃下火に山に<sup>は</sup>あはれなる  
あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる  
あはれなるあはれなるあはれなる

源賴光朝臣

あはれなるあはれなるあはれなる  
あはれなるあはれなるあはれなる

源賴光朝臣母

あはれなるあはれなるあはれなる  
あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる



平経章朝臣

おろけり老野にせらるしほほのめりふくしうんを

大江嘉言

あつちかきしより思ふしあけけしにふよき

かこりこりあて人のまじりりりけり

かこりこりあて 和泉公部

わがめいあぬ世にまこしよひにまよふかたをい

あつちかきしより

後京實方朝臣

かこりこりあて人のまじりりりけり

あつちかきしより

實源法師

あつちかきしよりあつちかきしよりあつちかきしより

あつちかきしよりあつちかきしよりあつちかきしより

あつちかきしより 原則成

あつちかきしよりあつちかきしよりあつちかきしより

あつちかきしよりあつちかきしよりあつちかきしより

後京も能

あつちかきしよりあつちかきしよりあつちかきしより

あつちかきしよりあつちかきしよりあつちかきしより



あぢたまの女にさしこころし

よみくし

ふみこころしこころしこころしこころし  
後京通表

独ひとりこころしこころしこころしこころし

道令法師

思ひこころしこころしこころしこころし

こころしこころしこころしこころし

糸之補親

まがしこころしこころしこころしこころし

歌

後京通表

こころしこころしこころしこころし

まがしこころしこころしこころしこころし

けしこころしこころしこころしこころし

源兼盛

こころしこころしこころしこころし

あぢこころしこころしこころしこころし

中納言成

あぢこころしこころしこころしこころし

あぢこころしこころしこころしこころし











ふみとすけすけいへしあはれいしとていふはれす

さくし

平重盛

あつちのいふのいふにまじりていふはれす  
みよのすけすけいへしあはれいしとていふはれす

いりりり

後系乃は

いふとていふのいふにまじりていふはれす  
ら賢朝はあはれいしとていふはれす  
のいふにまじりていふはれす  
みよのすけすけいへしあはれいしとていふはれす

さくし

あつちのいふのいふにまじりていふはれす

考よりいふのいふにまじりていふはれす  
ちあつちのいふにまじりていふはれす

いりりり

大申に能宣朝長

あつちのいふのいふにまじりていふはれす  
中治あつちのいふにまじりていふはれす

堀川大入長

あつちのいふのいふにまじりていふはれす  
いふにまじりていふはれす

いりりり

あつち











中東政義

こまよひとすむぢから今こゝに  
あまのこしにふるし年ごとく後徳朝を  
くしよもももあはしるよあ

良暹法師

あつはみかへてあうまらわすしとるし  
ちん

後東国房

うまうまの海ついで見しやまきまき  
関白前左大臣家にゆく経年志こいふ  
をよみかたむせしつ

左大臣

口井のちし帰らぬし成日かろくあはし  
ちん

右大臣

年をいふは(あ)のまに  
日いらくしついのあかひく  
けつあきけけいよあ

道今法師

うまうまの海ついで見しやまきまき

あまのこしにふるし年ごとく後徳朝を



後拾遺和歌集第十二

卷二

あはれよあはれよ又の日にけりけり

系し輔親

福なくくふらふらにまはりてきつらにきつらに  
實範朝きのしすえのまじしにけりけり  
あはれよあはれよ

源頼朝朝

あはれよ今朝つらにわかれなきつらに  
惟和朝きのしすえよあはれよ

水源法師

よはれよつらにわかれなきつらに  
平の親朝きのしすえよあはれよ  
又乃あはれよあはれよ

後東隆方朝

あはれよつらにわかれなきつらに  
源の朝

あはれよつらにわかれなきつらに  
女侍あはれよあはれよ

女侍後東義孝



君しつちやうしつちりし余なるこゝろに  
くまのこゝろにふりかゝりしよめる

伊勢大補

くまのこゝろにふりかゝりしよめる

くまのこゝろにふりかゝりしよめる

後京道信朝長

くまのこゝろにふりかゝりしよめる

くまのこゝろにふりかゝりしよめる

くまのこゝろにふりかゝりしよめる

くまのこゝろにふりかゝりしよめる

ちか海に浪のこゝろにふりかゝりしよめる

水原信師

ちか海に浪のこゝろにふりかゝりしよめる

ちか海に浪のこゝろにふりかゝりしよめる

西宮前左大臣

ちか海に浪のこゝろにふりかゝりしよめる

後京道信朝長

ちか海に浪のこゝろにふりかゝりしよめる

清原元輔

ちか海に浪のこゝろにふりかゝりしよめる



かゝるのまじりていかにしはけりなまに  
よみはなる さいふ

まのしをまじりにあはれはたかきしはけり  
さだかものいかにあはれはたかきしはけり  
てはたけりあはれ

かゝるまじりていかにしはけりなまに  
あつた白きぬにたけりははしはけり  
まじりていかにしはけりなまに  
こゝろまじりていかにしはけりなまに

赤深志

かゝるまじりていかにしはけりなまに  
くゝるまじりていかにしはけりなまに

けり 和泉武部

かゝるまじりていかにしはけりなまに  
越前守景理々々あまじりていかにしはけりなまに  
けりあはれ

大補令婦

かゝるまじりていかにしはけりなまに  
夕衣をあらまじりていかにしはけりなまに  
かゝるまじりていかにしはけりなまに

後原隆経朝臣

かゝるまじりていかにしはけりなまに







その名の通りである

よみか

この頃にはまだこの頃にはまだ

大戴高唐

板の通りである

よみか

よみか

津國の歴史である

兼仲朝臣の歴史である

よみか

この頃にはまだ

その名の通りである

よみか

よみか

この頃にはまだ

よみか

よみか

よみか

よみか

よみか

この頃にはまだ

よみか



まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては

work

まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては

赤松家

まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては  
まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては

讀人の名

まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては  
まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては

名大長

まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては  
まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては

work

まじりておぼしきものありては  
はたしめておぼしきものありては



入道拾玖九月らりありのまもつよの飛しては  
けいしんかしてあるをいさしはしめぬまゝに  
りしり  
大納言信徳母

清のつらもたまはしぬ油のうに今朝はぬらえとよは  
中つら岡白女のましまりあつにまにぬかし  
らるるつらつらにかなつぬはつらひはつら

馬ゆか

馬乃家、枕にまじらるる草葉はくさるまひん  
あすの夜よまじらるるにまじらるるまひん  
さつた

まのしんまげりつら乃ららまあすに我がつあり  
あ乃伊あつるる日夜のぬれ油まじらる  
人よ  
和泉守部

かへんまじらるる油のまか  
輔親とのつらまはつらまはつら  
の清つらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつら







おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり

和泉守部

おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり  
男はしむるにけり  
おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり  
おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり

赤染橋門

おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり  
おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり  
おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり

後京右衛門

おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり  
七月七日二葉院の四方よりあはれはける男  
たはしむるにけり  
おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり

後冷泉院西製衣

おのれはかたじけなくもあはれはける男  
たはしむるにけり



後拾遺和詩集<sup>抄</sup>第十三

卷三

陽明門院皇后<sup>まうらう</sup>はまご申<sup>まうらう</sup>けるはむら  
し月<sup>つき</sup>のま<sup>ま</sup>ふに<sup>に</sup>あけ<sup>あけ</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>又<sup>また</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>わ  
く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る

後朱雀院法御製

あやち草<sup>あやち</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>夜<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>は<sup>は</sup>後<sup>ご</sup>て<sup>て</sup>更<sup>さら</sup>も<sup>も</sup>志<sup>こころ</sup>路<sup>ぢ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>れ<sup>れ</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>

法皇之補

あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>

伊弉大補

あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>

教員法師

あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>

大江道衡朝臣

あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>







入申片信宣朝

たしなむとせむの命りてふことむし信板の周なりわき

ゆき  
よみへし

ゆくつとぬあふし<sup>いひ</sup>た<sup>いひ</sup>我よりあつたのやいふ

あにせむしはせらるるいりし

民部卿信信

東路のそいしむをうかむしむそあつたに五月を旅し

つ  
康賢と母

思ひせむしむしち<sup>いひ</sup>の月よりあつたあ<sup>す</sup>あ

あ  
あしへし

左道申物隆徳

かふるしむをうかむしむそあつたに五月を旅し

ゆき  
康賢と母

あつたつとせむしむし<sup>いひ</sup>の月よりあつたあ

ゆき  
康賢と母

あつたつとせむしむし<sup>いひ</sup>の月よりあつたあ

ゆき  
康賢と母

あ  
あしへし

増見法師

かふるしむをうかむしむそあつたに五月を旅し



こをば所ふはけら女よにのりけら

右大辨通復

母がふらふらとてはむいふにむかひる女よにのりけら  
清家うちこのまはむいふにのりけら  
はかの國とてはむいふにのりけら  
はむいふにのりけらとてはむいふにのりけら  
はむいふにのりけらとてはむいふにのりけら

よみ人

そのまはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら  
そのまはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら

よみはける 律師慶喜

そのまはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら  
源朝總執事ちこのごといふの國とてはむいふにのりけら  
けらはかの國とてはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら  
けらはかの國とてはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら

讀人不知

わらふらふらとてはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら  
中納言はく頼りてはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら

大和宣旨

ちかむらとてはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら  
ちかむらとてはむいふにのりけらとてはむいふにのりけら











源政成

わぶよしや限<sup>333</sup>るるしんがたふくはなはしめはつとてつ  
伊勢の弁官にしむるまはちのうらつとてつ  
くよーのしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
こましまあちあちしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

左京大夫道雅

あは板<sup>333</sup>東路<sup>333</sup>しんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
柳葉<sup>333</sup>のゆふしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
今しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

又あつしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

から乃くのそしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

前大納言経琳

あつしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
中納言<sup>333</sup>のあつしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

いっつ

あつしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん











後拾遺和詩集第十四

恋日

らかりわがこぼしけりあまのこぼし

清原元輔

あまのこぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし

申約言はる頼のまじりけり

ふ日は師母

若乃恋のこぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし

こぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし

道命法師

後平をうめしむる思ひのこぼしけりあまのこぼし

恋し

後平元真

あまのこぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし

惠慶法師

あまのこぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし

あまのこぼし

あまのこぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし

和泉女部

あまのこぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし

あまのこぼしけりあまのこぼしけりあまのこぼし







平兼盛

思ふにまじりておれぬにむすも今うしと  
男のあてはけるはむすこにけり

中京頼成妻

おれにむすもあはれむすのいそむ  
むすこ

信国法師

周ちる梅のまじりて朝をくわ  
こつみ

和泉五郎

わがむすもあはれむすのいそむ  
むすこ

左のむすこ

世中にいふむすのいそむ  
ありけり

清原元輔

うがむすのいそむ  
堀河の者大良のむすこ

大貳三位

あはれむすのいそむ  
むすこ

藤原有親

わがむすのいそむ  
むすこ







わがくにありとそみせしむ川女お思ふ袖の名社信

西宮おたまた

よそよふらへにぬら思ふたつちちちの袖のまにに  
日はつゆらつゆらまのこままらからかたけつ切すわ

天徳四年の裏尋合日よめら

後京え真

君こがかりにまじり控るをくしてけりあつら  
む

あつらつちちおれおしめあはけりかたけつ切すわ

申納言はくぬかまはつちちのこ

大和宣旨

あつらつちちおれおしめあはけりかたけつ切すわ

小井のまはつちちのこ

民部卿信

あつらつちちおれおしめあはけりかたけつ切すわ

西宮おたまた

あつらつちちおれおしめあはけりかたけつ切すわ

あつらつちちおれおしめあはけりかたけつ切すわ

入信持改

あつらつちちおれおしめあはけりかたけつ切すわ



きりす

相摸

かへりての枕のきりす

永承六年の裏尋合

うみほりて思神にあらわさるる

きりす

お無月よのほろよ

きりす

かへりての枕のきりす

後束長

つらつらと下りて煙

かへりての枕のきりす

後束朝長

おらしてのきりす

きりす

きりす

人のきりす

かへりての枕のきりす

きりす

入道持政

我志のきりす

きりす

大納言道徳母







あらしり逢ふとてあはれなる男乃してはしりり

和泉女部

白ふとよとこの世にまらりし

女部

後拾遺和詩集第十

雜一

乞

善法為改朝

年ぬれにあまのこまきる宿のらにん今こころある月か

申治忠信女

月影乃りるをわしとるふよはしよのあつと

後京為時

わがさうらふついでいよまにうらまふらんはたはた

船中月とていふよまはけ

源師賢朝



みなれそらうしてうつくしきまの月をいふは

池上月をよめる 良徳法師

月影乃こもくまに池水をみりて思ひけり

後冷泉院御所きりてのまはて月をよめる

けり 大藏卿長房

月けいのせいにけりよいと更紗をう照まけり

連衣音は月をみりて思ひけり

源朝家朝

友母乃両くちりやけりて月のさかりにそなは

月乃しかりうづけりて思ひけり

とわりのいふまに思ひけりてうづけり

ちりて葉の光はまの光にけりて思ひけり

れんてわりの思ひけりて思ひけり

いぬの家乃に思ひけりて思ひけり

うづけりて思ひけりて思ひけり

しるしをいふ思ひけり

懐圓法師

池水にわたりて思ひけりて思ひけり

申納言春宮の思ひけりて思ひけり

りて思ひけりて思ひけり



水鏡法師

永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事  
永長四年の事

江休長

鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家  
鹽見殿女御家

堀河宮人

依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客

水鏡法師

依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客  
依月客

水鏡法師

賀陽院  
賀陽院  
賀陽院  
賀陽院  
賀陽院  
賀陽院  
賀陽院  
賀陽院  
賀陽院  
賀陽院

後冷泉院御製

月夜中  
月夜中  
月夜中  
月夜中  
月夜中  
月夜中  
月夜中  
月夜中  
月夜中  
月夜中

渾心尹清に親

板屋  
板屋  
板屋  
板屋  
板屋  
板屋  
板屋  
板屋  
板屋  
板屋







しうをふらふよみ付けのよみえら

清原元輔

あまの月がさし思ふあつあつ昔の世の世のこころ  
月のおも思ひをのふこふとよみ付け

後白河院朝長

どいさつら思妹の月女共こころのさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう

源師光

常よりさうさうさうさうの月とみてわい共さうさうさうさう

齊信民部卿のしらえはすくわつさうさう  
かの女方取りもせれい法はさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう

民部卿長家

とろこさるえいも我もさうさうさうさうさう  
通房朝長月さうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう

江守長

月女共さうさうさうさうさうさうさう  
思わあつさうさうさうさうさうさう



源為善朝臣

とて入るる世の世に又ハニと  
ちすよこついでに海にたはるる  
ちりふくまき又ハよのすかたに  
けれ月乃おもろくもけりあつて  
もえら

聖梵法師

しん月の敷いもつれに  
中園白サ持りけり  
かにもして月乃ら  
出たりけれに  
あかりかたに

赤染束門

ふりて人乃ら  
あつてはるる  
あつてはるる  
あつてはるる

三原院御製

あつてはるる  
後集在院は月乃  
のりをとけて

陽明院

今つてはるる  
あつてはるる







よるよかくれる果る夜の月をうらやましくいふは  
月をみくもみはけ

中京長國妻

わらわはあはれおかしき月のこゝろをうらやましくいふは  
入道持政もうらやましくいふは  
かたじけなくもあはれおかしき月のこゝろをうらやましくいふは  
こゝろをうらやましくいふは

大納言通徳母

いとしきよるよの月をうらやましくいふは  
月をうらやましくいふは  
入道持政もうらやましくいふは

とらふはあはれおかしき月のこゝろをうらやましくいふは  
あはれおかしき月のこゝろをうらやましくいふは

くまの月をうらやましくいふは  
しつみや乃清はうらやましくいふは  
こゝろをうらやましくいふは

弁官女御

かみあはれおかしき月のこゝろをうらやましくいふは  
月をうらやましくいふは

曾孫お徳

川みやわらわはあはれおかしき月のこゝろをうらやましくいふは  
六条お存院もあはれおかしき月のこゝろをうらやましくいふは



















陸奥は及びらん  
し新はまやうな  
かくなりけり  
陸奥は及びらん  
し新はまやうな  
かくなりけり

能因法師

御弟京の御  
母とそくれ  
れくもはけら  
かごののい  
まににけり  
人のあはれ  
御弟京の御  
母とそくれ  
れくもはけら  
かごののい  
まににけり  
人のあはれ

とらうら  
によう  
大納言道  
總朝長

夕人昔に  
ちんをく  
るこの人  
にう人  
源経隆朝長

源経隆朝長

何れこ  
この思  
いよひ







あわけらるるまゝにまじりてはなす

弁官女御

かたにけりし御書より乃おまわらせし思ひは成り今も御  
後未だ後うまを流れて上東門内白河の  
とらふはなれり乃いぬく吹けりいと光り  
かの院にけりし御書は乃いぬく吹けりいと光り

後京範北朝

かたにけりし御書より乃おまわらせし思ひは成り今も御

かたにけりし御書より乃おまわらせし思ひは成り今も御

後拾遺和詩集第十卷

雜二

入道持ぬぬるはつらば成りしけり  
あつらひしをいさやけりし伊いりり

大納言道總母

かゝる乃枯の下草くはしに猶女のえりやまどみ  
いづれにけりし御書は乃いぬく吹けりいと光り  
いづれにけりし御書は乃いぬく吹けりいと光り

馬の侍

より強乃すしのもあけいす井けぬのじろ言とらふ











大江の質相換守も侍けるはよりの國  
日下りしき江も日め侍ける此身も侍ける  
此身も侍けるはよりの國

相換

途坂乃きらふりよは社にみし東路はほそき  
左大將朝光がしほはか  
しほのよりの侍けるはよりの國

讀人不知

福思ち乃お思ふはかき思ははむのよりの國  
右政大將の侍けるはよりの國

とみらふんてよみ侍ける

後京五平朝き母

すむ人乃の侍けるはよりの國  
女乃の侍けるはよりの國

小一系院

曉の侍けるはよりの國  
かき侍けるはよりの國  
かき侍けるはよりの國

和泉本部























徳通朝良女代思ひしけるよとありてあ  
しませよのちゆけまわぶり乃髪をみく  
女の女のしよくちみふらこいりりみ  
ゆけ代りくよみくつりし

田原宰相

ふりまきまはまは限つてよとわすふ名を情情  
資良朝良女人きくゆけは國韓神のゆ  
りこのゆはまよかすしてみういふたの  
せみまのちりかゆけはさるうかみよのし  
こしてゆけぬまによめる

女侍ゆ

ちんちんまきつてまうをなこのゆはくはく  
家経總朝良女人きくゆけはさるうかみよのし  
あしよはゆけ代りし

伊賀女侍

つうういともくわは福なこのゆはくはく  
た東門蔵人よるみじりしはくはくはく  
ゆせゆけ代りしはくはくはくはくはく

女侍及京義者

あしゆけ代りしはくはくはくはくはくはく  
あしゆけ代りしはくはくはくはくはくはく



人乃じと夫のやうく依けるややてなして  
かこちしむけりてなむと思ひたること  
まじきゆき乃じと人のあつたにけ  
依ける  
左大臣朝光

おひぬとよごきのかかぬく浪子とてかへば  
妹をまうごひりぬらぬにりりし

源信房

ひりりしとて妹はかへりりかて妹のまね  
おひ乃ちしむけりてなむと思ひたること  
まじきゆき乃じと人のあつたにけ

和泉武部

おひぬとよごきのかかぬく浪子とてかへば  
中納言に頼じまはりしとてかへりりかて  
妹をまうごひりぬらぬにりりし  
おひぬとよごきのかかぬく浪子とてかへば

相模

おひぬとよごきのかかぬく浪子とてかへば  
乃じと人のあつたにけ

中京長岡

おひぬとよごきのかかぬく浪子とてかへば











こゝろにまはるるをいふは侍は地

和泉武部

かゝるるをいふは侍は地

かゝるるをいふは侍は地

かゝるるをいふは侍は地

かゝるるをいふは侍は地

かゝるるをいふは侍は地

かゝるるをいふは侍は地

女侍は地

かゝるるをいふは侍は地

師資朝臣乃とのいひしをきき  
あぢちしをて後々かしては  
かゝるるをいふは侍は地

武部令婦

かゝるるをいふは侍は地

和泉武部

かゝるるをいふは侍は地







後拾遺和歌集<sup>抄</sup>第十七

雜三

海中も棟利方はあはしつゝあぢきなくの  
うみゆきこころあぢきなくの  
るーけり  
清原元浦

きれ又年(わがもあはれきこころ)  
あ中はあはれきこころ  
源重光

春にわさおのほけの都をまはした  
いづれもあはれきこころ

大舟はまきりかたあはれきこころ

大江は衛朝長

河舟はあはれきこころ

大船言ふは宰相もあはれきこころ

大江を基

母甲をまきりかたあはれきこころ

いづれもあはれきこころ

藤原國行

いづれもあはれきこころ

小一乗者大將もあはれきこころ























世甲まらうよらん久しうなまし思入の事

よひのりりる

伊勢人輔

かたすしよ思ひあつてわごころさしうら有切の月よのむね

世乃はるまひけるらん梅花をみくもあま

小大君

ちるどそめになかし梅花をみくもあまの事 結ぶ

京よりくしてはける女をいらくもあまの事

て後し世もあまの事思ひあつてはるまひ

くわせぬまひなくして京よりうらうしすくもあま

はける世もあまの事思ひあつてはるまひ

けるわらわの事思ひあつてはるまひ

讀人不知

いづかよりわしを乃あまの事思ひあつてはるまひ

或人<sup>あま</sup>の事思ひあつてはるまひ

とよあまの事思ひあつてはるまひ

かくて女あくなりよけはるまひ思ひあつてはるまひ

いけはるまひ思ひあつてはるまひ

はるまひ思ひあつてはるまひ

世乃あまの事思ひあつてはるまひ

和泉女部



いひつゝのさかへしはなほはまきしあはちのまよひあはれ  
あはれいひつゝあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

堀河者人表

常よりいへばまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ  
申納しつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ

草乃葉のまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふ  
申納しつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ  
のまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ

赤澤場門

清乃あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
申納しつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

源順

申納しつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ  
申納しつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ  
申納しつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ乃々言ふまきしつ



おしよ鳥乃啼けりけり

松法師

切あつと笑しけりけりよもきりくふらふくそけり

文集乃蕭々晴西打言おまごころとよもえり

大貳言喜

あ〜く羨し人をかつじにさうしるにみさる

王昭君をよめり

赤染末門

おげ〜〜道乃あ〜しゆさあひまらけりしをさうふ

僧都懐壽

思ふや古き都を〜ら〜ま〜た乃國人よ〜〜の

懐圓法師

み〜めい〜鏡乃鏡のけり〜の〜の〜あさ〜り〜

入道お乃あ〜い〜ま〜ち〜君は成さめし念佛

お〜あ〜い〜けり〜ら〜ら〜後世のは〜あ〜り〜

ち〜つ〜い〜けり〜は〜あ〜り〜し〜ら〜ら〜の〜鳴

ち〜つ〜い〜けり〜は〜あ〜り〜し〜ら〜ら〜の〜鳴

井つ〜の〜あ〜ま

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

終りよ出〜し〜は〜よ〜み〜右道馬場のね〜







思ふに、はなはだ、道に入道して、さういふもの、た  
高階成順世のうし、はなはだ、さういふ、  
人の、さういふ、さういふ、

よみ人

思ふに、はなはだ、道に入道して、さういふもの、た  
高階成順世のうし、はなはだ、さういふ、

伊勢大補

思ふに、はなはだ、道に入道して、さういふもの、た  
高階成順世のうし、はなはだ、さういふ、  
思ふに、はなはだ、道に入道して、さういふもの、た  
高階成順世のうし、はなはだ、さういふ、

お申納言 孫基

思ふに、はなはだ、道に入道して、さういふもの、た  
高階成順世のうし、はなはだ、さういふ、

上東門院

思ふに、はなはだ、道に入道して、さういふもの、た  
高階成順世のうし、はなはだ、さういふ、

前大納言 仁

思ふに、はなはだ、道に入道して、さういふもの、た  
高階成順世のうし、はなはだ、さういふ、

後系 統理



君は人おれちのれいふかふお入ての後、（白）俺一りおま

御ふし

三桑院の御製

ふかふ思ひ出けし人をおまひりくもれおま

法師は如くおまひりけりお祈りお極め候て

侍りけるを

お甲約言義懐

千人おれおれ乃は古郷にらるるこまきこり考れ

おまひりけり長谷も候けり此入道中坊の

おまひりけりおまひりけりおまひりけり

おまひり

おまひり

君はよおれすしつらおれんらおれんらおれんら

良暹法師大京よりおれおれおれおれおれ

おれ

素意法師

水草おれおれ乃志水座すみへんは月おれおれ

おれ

良暹法師

おれおれ乃志水座すみへんは月おれおれ

良暹法師の御製

後京國府

思ひおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれ







河原流りゆりゆりよみ侍ける

大江朝言

思ふ心は今なるも老井の信女からかたわ  
わあ一軒して松をよみ侍ける

江侍辰

年一しう松をよみ侍るは昔のまゝのまゝ  
よしすみ侍ける家をもつてはわたり  
すくして松乃末こゝろの女を侍りてはわたり

左衛門督お方

うをうをみかへみかへとるる古郷ふるさとにからぬ松をわたり侍

六条中務親王の家より日の松をうつく侍り  
けつと乃みかへ後うれ松をみえよと  
侍ける  
源為善朝臣

鳥のうへに松をうりては侍りてはわたり侍るは  
うへ中のまゝのまゝ侍りてはわたり侍るは  
なかりける人の松をよみ侍りてはわたり侍るは  
いよみ侍るは  
じよ乃みかへ

ぬれをうよみ侍りてはわたり侍るは  
鎌竹かたけ不并ふび侍りてはわたり侍るは

大藏師侍



みづりゆき色たかき世皇行ふよき世をすめよし

永泰四年内裏尋春に松とよ丸ら

藤原兼房資仲

りろ乃ちの乃に二年名世松入て日にからま

う乃とよいごと松洞座よめむのりごとく

いにらまのりあけりよ

清和

よりよの妹をもちうすくかき世の志根松

長一丸

後永義孝

みちよとほりうもくまじりのおはるいよ友のら

宇治りくく一哥よみ侍けり山家族宿

こりよた

民部卿経信

様ねすの宿いみよにちり共してよ乃がけり

用白前大<sup>のちゆちゆ乃</sup>まうち君の家めくかひま

をよみ侍けり

藤原範永朝

鳥十かていごも曲んかつら乃池もいめのかい

あは乃浦をよみ侍けり

後永経衡

喜乃りりもいはの燈をくまはるすま

龍門の燈

申納言山頼











平棟伸

わすれ草にみえつては信者乃屋の人の思ひたて  
みくもく信けつは丸まののこつてい  
あつたもあつてよみ信けつ

源頼實

思ひまねくは信者乃屋の口浪ぬつ世をかた  
徳野(ま)く信けつは丸まののこつてい  
すしてよみ信けつ

増基法師

らんけい交のまはすの江ノ者乃屋の口浪ぬつ世をかた

奉周和泉はまはるはり乃からまに  
く信けつは丸まののこつてい  
あつたもあつてよみ信けつ

赤松志門

あつたもあつてよみ信けつ  
上東門院信者は丸まののこつてい  
あつたもあつてよみ信けつ

上東門院新宰相

都出くあつてよみ信けつは丸まののこつてい  
あつたもあつてよみ信けつ











わくちうのりけり

讀人不知

明<sup>あき</sup>ちうららなるにのみとわくちうのりけり

る

實方朝夫

ちうのりけりなるにのみとわくちうのりけり

ちうのりけりなるにのみとわくちうのりけり

ちうのりけりなるにのみとわくちうのりけり

けりなるにのみとわくちうのりけり

赤澤忠門

名乃のりけりなるにのみとわくちうのりけり

貫<sup>つと</sup>のりけりなるにのみとわくちうのりけり

惠慶法師

ちうのりけりなるにのみとわくちうのりけり

る

紀時文

ちうのりけりなるにのみとわくちうのりけり

紀時文のりけりなるにのみとわくちうのりけり

清原元輔

ちうのりけりなるにのみとわくちうのりけり

家集のりけりなるにのみとわくちうのりけり

系<sup>ちう</sup>のりけりなるにのみとわくちうのりけり



花乃志へよみらる下集るはじりてはまのりよのりよ

伊勢大補の集を人のこいよをいきてはけるよ

けいふかてし 康賢と母

きしぬすいんわらむわらむ昔のあみ草にわらて

後三皇成沛は月わつこいける也ゆる人をし

いこりありこい法らんけいんくもわらる

中いづつして身よも人こおらとこいけはけいんく

なごりよのりよ

ころ乃家ののりよもいけいんくのあぢかへいんく

七月らりかにつこい月みよあろくいあわは

けいよき人ら後新が納言のけいんく

まわい人ら後新が納言のけいんく

いけいんくわらむいんく

いけいんくわらむいんく

後三皇院のりよ

妹はあはしるわらむわらむ

義忠朝臣のいけいんく

みづいんくわらむいんく

赤松のりよ

あはしるわらむわらむ



かゝるしんじつして道命は師のまじりまて  
まゝとく人乃よみかしくは

よみ人しんじ

まゝとく命うまゝ思ひをたけりなるはくもらんかまきみ  
ちんた新はゆけよまをいゆふあけはれ  
しんじの女に言はせしよあはれいんげん  
よみなるはくもくもくもくもくもくもくもく

親子の親と

まゝとくつやし種もくもくもくもくもくもくもく  
良羅は師のまじりまて

あけしんじつして道命は師のまじりまて  
まゝとく人乃よみかしくは

藤原孝善

まゝとく命うまゝ思ひをたけりなるはくもらんかまきみ  
ちんた新はゆけよまをいゆふあけはれ  
しんじの女に言はせしよあはれいんげん  
よみなるはくもくもくもくもくもくもくもく

和泉武部

まゝとく命うまゝ思ひをたけりなるはくもらんかまきみ  
ちんた新はゆけよまをいゆふあけはれ  
しんじの女に言はせしよあはれいんげん  
よみなるはくもくもくもくもくもくもくもく



うーをるやうに

六条三條院宣旨

馬の御供進を以て我は馬がよき御供進の御供進は  
うーに御供進はけり此の御供進の御供進  
を御供進に御供進

馬の御供

うが御供進の御供進の御供進の御供進の御供進  
か御供進の御供進の御供進の御供進の御供進  
より人の御供進の御供進の御供進の御供進の御供進  
つげ御供進

教皇形總朝長

あうに御供進の御供進の御供進の御供進の御供進

いかに御供進の御供進の御供進の御供進の御供進



後拾遺和詩集第十九

雜八

後冷泉院み乃官ご申しんけけはは二条にじょう後ごり  
わわくくぬぬりりつつうういいけけるるををみみここととりりふふままや  
わわりりししよよみみゆゆけけるる

出物辨

春はる一いつ乃の子こ日ひいいかかくくすするるにに共ともじじううろろ二条にじょうのの松まつみみちちりりふふ  
二条院にじょういん東官とうくわんはは乃の官くわん申しんけけるるららににかかににかかしし  
ののけけららああ申官しんくわんのの乃の官くわんふふちちふふににかかいいきき  
ししままごご思おもひひににじじりりるる人ひとののゆゆききけけれれ

大貳三位

志しののいいはは乃の海うみををけけるるううろろりりととりり思おもひひこころろにに枝えだはは

出物辨

出物辨

春はるのの日ひははゆゆききののちちををいいふふのの枝えだををつつやや栲かし果くわるるりり  
後冷泉院ごれいせんいん乃の官くわん申しんけけるるははううののゆゆききののいいはは  
一いつ品しん乃のままええれれ女によ房ぶどうごごももろろごごももはは危あやををととててわわららいい  
ららるる故ゆゑ申官しんくわんののいいててととゆゆここををいいてていいりり

源為善朝臣

むむ威い考こう乃の乃のののわわををほほのの思おもひひををすすららかか妹いまいののゆゆききののいいはは  
二条院にじょういん春官はるくわん申しんけけるるはは式部しきぶ乃の敦あつ儀ぎ親おやとと







後一系院中へかくかりしはまりと  
流しけりしにう乃と侍けるわり入道前  
右政大臣いぬこそと侍ける所をよ  
りしめ後右政大臣の侍しけりしを

鑑子に親と

ふりり出るのけをみて一年のけりし物か

入道右政大臣

とろのいなるし葉のしと志のわたりし物  
後一系院中へ賀茂の幸侍ける上東門院  
かしとろのわたりしと野よりしと

くろ又乃わいぬきしと

鑑子に親と

みろしとかのけをみぬる  
後冷泉院中へ上東門院へ九幸あへし  
とろのわたりしとろの硯の物も  
に梅乃枝をいぬとろのわたりしと  
かみしとわたりしと

上東門院中將

みろしとわたりしと  
小辨斎院へ留り侍る



よしとていさぎぬけらるる

六条院再行宣旨

ゆしとてやうけらるるのよはむる月のかろきやうそしれ  
申治おを政大長およゆけしは春日のついで  
よぞめらゆふ又の白雪のふゆゆけり  
大納言云はつしはしりける

入道前を政大長

つらむい春日の京の雪多れにけりそふさうや

よ  
よ大納言云は

あけにたぐゆけりるる雪やよぬ春日の乃ちる記

二条前を政大長おゆけしはかすのいれ  
よゆりて又乃日暮のいせしうらゆれ  
入道おを政大長のよゆけり

みろしらす乃京のわさ事にかきまつて今朝を社  
上東門院長家民部卿は二条家よわごと  
ゆいゆけりらにらたは幸あかりてら  
きんくのいあめはけしよるつる新たまよ  
よしとていさぎぬけらるるのよはむる月のかろきやうそしれ  
申治おを政大長およゆけしは春日のついで  
よぞめらゆふ又の白雪のふゆゆけり  
大納言云はつしはしりける  
よ大納言云は



伊勢大浦

年じまらかゝぬの雪はえり日ありわらうらうら  
家をのりしとてわがきみしてはるけり  
ルり

冷泉院東宮ごまける所女の石舟の舟  
かろくしにかこしよをよめごまがせし  
多共ハ 源重之

うしとみすえの情状は新女共三つとくしよを  
春かゝら白人乃わらう所給よしと  
毛山院御製

春まはれしとぬよの年成(ぬか)はしむる雪の  
之東院御は大嘗會乃水鏡をこすしとの比  
雪乃ふとけけるよ大系にもみけるかお舟  
あまのせしはしりしけり

伊勢大浦

よしよじらうらみうらをよそりて小塩のよいさ幸いさとみ  
ぬ 女将井后

小塩よみすもみは清しうらやすしいのいはるけ  
一巻院ごときはかみり上東院にいにいなり  
おしよはしけらぬのい又高のいといを







もや日けにわたりてくみのうらわしん  
てて侍ける  
後京長徳

おつけ車かてし朝かきよまはたのさくま  
わあしん乃又尊のよりのさか  
かあしん乃又尊のよりのさか  
はましくみ侍けるあゆみのよりに  
のよしすいしはる侍ける

鎌子ゆ歌と

柿代よわす侍る夜に  
一多代中村皇太后宮又尊もまはた侍る

はるにころころと  
侍けるあしん乃又尊のよりに  
をよめしすいしはる侍ける

後京實方朝と

わし乃おわの火に侍るを  
と乃よ侍ける女の又尊もまはた  
きて侍けるいしはる侍ける

源頼家朝と

まはた侍るあしん乃又尊のよりに  
くのいしはる侍けるあしん乃又尊のよりに







後醍醐天皇

この頃の浦もさうしてよる海とあり所ふかたをわら  
頼國朝を北伊守りく依ける所ふかた  
すわりくぬかりぬける所ふかた  
こかけぬよりみ依ける

連叔法師

老乃浪よきこころいふ  
肥後守義信くころ依りて乃くぬ依ら  
野の花のみさやういよよよよよよよ  
ゆまはいにいける

源兼長

うらじれ駒とて思奴の草がれもきこみ入は  
わじよよよよよよよよよよよよよよ  
いけいけいけいけいけいけいけいけい

源兼後母

もよよよよ都の花のいけいけいけいけいけいけい  
く

康資と母

次つすこち乃るなりかよよよ都の花入ちるいけいけい  
いけいけいけいけいけいけいけいけいけい  
乃面白くいけるをみく



大貳 高遠

ふらふらしてわらふにやあつては花より先さきによるうらふ  
みらるくめははるけくも申す宣方朝をの  
まはるにひらきける

後京實方朝を

かきふし思ひしらふ東ちあひけりとのほとほふふの  
こしははるのまにむらむらのまより  
まはるにひらきける

みらるくのわらふはら君の思ひあふままかから  
実の朝をみらるのくめははるけくはひひららる

大江は衡朝を

都はみれをり君に思ひひらむこの人人は君成成ふ先  
る

後京實も朝を

しあしあふ及申しはあしあふ人のるるとあしあ  
栲津國はあふ人及今る今るとあしあして後  
と又京はあひけるをきて人人はかりりてよめ

赤染也門

あかしてわらふにまはるの國國は今今くはあはれ  
し京京にひらきけるあはれはるのまの  
まはるのまはるのまはるのまはるのまはる







あはれなる御心は  
伏見の御心は  
ては白雲の御心は

棟後總朝長

みかへくらの御心は  
かみあはれなる御心は  
たるとわが御心は

よみ人

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

蓮仲法師

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

入道信能宣朝長

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は











よはすみうの世の國のゆかりの  
いかにいひす良遣は師をこわすて昔  
乃ま早の世のいかにいひす

慶範法師

思ひこころのいかにいひす  
いかにいひす乃ま早の世のいかにいひす  
よに思ひこころのいかにいひす  
いかにいひす乃ま早の世のいかにいひす

師おゆた

いかにいひす乃ま早の世のいかにいひす

前伊勢守義孝守治前右大臣のいかにいひす

天台府の教圓

いかにいひす乃ま早の世のいかにいひす  
いかにいひす乃ま早の世のいかにいひす











後三鳥院出ほりし日者社より幸給り  
けるにわにまわらひしよしふりし奇事  
とみくよみ給ける。

大貳實政

わらけし日者乃出社了りし日者社より幸給り  
けるにわにまわらひしよしふりし奇事  
とみくよみ給ける。

後東経衡

ちやるの秋のぬるまゝにわらけし日者社より幸給り  
けるにわにまわらひしよしふりし奇事  
とみくよみ給ける。

乃ごらちけし日者社より幸給り

治部伊原

結業のゆゑに雪のまゝにわらけし日者社より幸給り  
けるにわにまわらひしよしふりし奇事  
とみくよみ給ける。

徳田法師

うご濱にわらけし日者社より幸給り  
けるにわにまわらひしよしふりし奇事  
とみくよみ給ける。

ゆけり

よみ人しる







釋教

上階カミ古乃良樂講カミは西にしへへよみ付け

光源法師

一乃別ニ乃ををああここととのの後後ううななららししるるまま

前律師まへ師しをのの置置

常ととのの義義ななららししるる新新つつりりのの始始ここのの人人

二月に二月のの夜夜申申りりのの日日はは伊伊勢勢大大輔輔ののままに

にりりのの慶慶乾乾はは師師

一乃別ニ乃ををああここととのの後後ううななららししるるまま

伊勢大輔

一乃

一乃別ニ乃ををああここととのの後後ううななららししるるまま

二月に二月のの夜夜申申りりのの日日はは伊伊勢勢大大輔輔ののままに

にりりのの慶慶乾乾はは師師

伊勢大輔

一乃別ニ乃ををああここととのの後後ううななららししるるまま

二月に二月のの夜夜申申りりのの日日はは伊伊勢勢大大輔輔ののままに

にりりのの慶慶乾乾はは師師

一乃

伊勢大輔

一乃別ニ乃ををああここととのの後後ううななららししるるまま



懺はむしちんいけりよ佛めしよんて  
周防内家のせしよまてをこむけりよん  
ちこちんてけりよん

弁乳母

八重菊もちりす乃をよみ流し九土ふるまふりつ  
を皇太后宮又部大業経信養を也行り  
り法華經もあつてあつてけり

康賢王母

笑ひきり流しよるよそく家や金うし衣れまこなる  
故ち内門者大信家の女康車こりよあひあり

てほつてつらつらけりよむけりよむのしん  
れもつての車つらつてけりよむのしん  
車もつてつらつてけりよむのしん  
けりよむのしん

よみ人

ちんてつらつてけりよむのしん  
月輪觀とよみ人

僧都賞超

月乃とつらつてけりよむのしん  
維摩經十茶ゆるつてけりよむのしん



いふと  
お大納言に

見よけいもむるお世草葉のよきうに袖をけし

同業乃申この月氷月のこころに

めろ  
小辨

常るぬ我方は月の氷の世にすこきまをわい

三隻唯一  
伊流大補 中おこ

ちる花にやまにほ世申に乃りよめい

化城吟品  
赤保衛門

あゝぬてらり乃むらりよめいほいぬらんとし

康資と母

道にのみ申らるるわい思いに乃常るぬよ

又百才子  
赤保衛門

夜にらぬしししししししししししししししし

喜島田  
康資と母

乾鳥乃いしししししししししししししししし

音了  
前大納言に

母にすくはらりぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

書寫乃年ユス結縁経巻にけい

あまのるやとくしししししししししししし

いしししししししししししししししし











くらすみきよはらけいしむわはせに  
り

よみへん

らうへんふすまふいおひをうておこしち  
る

天名たは源氏

やみしつあひよいしよこりかになりけ  
は師乃腐ともこておけるをうてし

和泉守部

らうへんふすまふいおひをうておこしち  
る

くらすみきよはらけいしむわはせに  
り

七月のち月乃あつこしつあめのまはけい

女将藤原義孝

わがせつあつこしつあめのまはけいしむわはせに  
り  
三葉たはほしつあめのまはけいしむわはせに  
り  
はらけいしむわはせにむらけいしむわはせに  
り  
殿上はらけいしむわはせに

小大君

みらきつあつこしつあめのまはけいしむわはせに  
り  
くらすみきよはらけいしむわはせに  
り  
あせけいしむわはせに







延喜寺七仲卷中一册

以照之御文早御  
修年不御慶仁子也

三佳











